

## 現代バリにおける人形遣いダランの 宗教的役割剥奪の歴史とその復権の兆し

梅 田 英 春

### はじめに

インドネシア・ヒンドゥー教評議会 Parisada Hindu Dharma Indonesia、(以下、ヒンドゥー教協議会と表記する)の機関誌『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ Warta Hindu Dharma』<sup>(1)</sup>の2002年8月号(写真1)の中に、影絵人形芝居ワヤン wayang の人形遣いダラン dalang が、悪魔祓いであるサプ・レゲール Sapu leger 儀礼<sup>(2)</sup>を行ったという記事が掲載された。そしてその内容は、儀礼の概説とその文化的意義について肯定的に述べたものだった。

サプ・レゲール儀礼は、1年を210日とするウク wuku 暦<sup>(3)</sup>の「ワヤン週 wuku wayang」<sup>(4)</sup>とよばれる7日間に誕生した子どものための浄化儀礼であり、ダランはこの儀礼の中で、特定の演目のワヤンを上演し、その終了後に浄化儀礼を行う。ワヤンの演目の中には、ヒンドゥーの神々が数多く登場するにもかかわらず、特定の誕生日と「穢れ」を結びつける信仰や、人形遣いダランが儀礼を行うなどの点から、サプ・レゲール儀礼はきわめて土着信仰の影響が強い儀礼の一つと考えられている(梅田 1996:104)。そうした理由から、サプ・レゲール儀礼をこれまでヒンドゥー教の儀礼として紹介した文献はひじょうに少なく、ましてインドネシアにおけるヒンドゥー教の指導的立場にあるヒンドゥー教評議会が発行する機関誌の中で、この儀礼について肯定的に書かれたことは発



写真1 『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』  
2002年8月号の表紙。描かれて  
いるのはバリ島のワヤン人形。

刊以来一度もなかった。こうしたサブ・レゲール儀礼のヒンドゥー教における位置付けを考えると、この記事が『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』に掲載されたことは、驚くべきことといえよう。

本稿では、この儀礼を司る宗教的職能者ダランの宗教的役割に注目し、その宗教的地位が1950年代後半から始まったバリの宗教政策や文化政策の中でどのように変化したかを明らかにするとともに、2002年の『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』にみられるサブ・レゲール儀礼に関する記事が何を意味しているかを、現代バリの混沌としたヒンドゥー教の諸事情から読み解いてみたい。

### 記事「ジャカルタにおけるワヤンの鑑賞」にみるサブ・レゲール儀礼

『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』に掲載された記事「ジャカルタにおけるワヤンの鑑賞 Apresiasi wayang di Jakarta」は、ジャカルタで2002年に行われたサブ・レゲール儀礼の様相について記されている。この記事はインドネシア各地のヒンドゥー教徒からの投稿のコーナーに写真付きで掲載され、約3頁に及ぶ。内容を抄訳すると以下の通りである (Diya 2003 : 18-19, 35)。

2003年8月17日、「ワヤン週」の最終日であるトゥンブック・ワヤン tumpek wayang<sup>(5)</sup> の日に、ジャカルタのワヤン上演グループがサブ・レゲール儀礼を行った。儀礼の依頼人はジャカルタ南部に住むトゥンブック・ワヤンに誕生した子どもをもつ夫婦である。この日に生まれた子どもには「ワヤンの聖水 tirtha wayang」<sup>(6)</sup> が必要なのである。

儀礼はワヤンの上演から始まった。この物語は、カラ神 Kala<sup>(7)</sup> が弟のラレ・クマラ Rare Kumara 神を貪り食おうと追いかける物語である<sup>(8)</sup>。この兄弟はともにシワ Siwa 神とパルワティ Parwati 女神<sup>(9)</sup> の間に誕生し、かつ二人ともトゥンベック・ワヤンに誕生していた。シワ神はすでにカラ神にラレ・クマラ神を食べる許しを与えていたため、自らの子どもを助けることができず、地上界のクルタ・ヌガラ Kerta Negara 国に助けを求め、降臨するようラレ・クマラ神に命じた。

それを知ったカラ神はクルタ・ヌガラ国を襲うが、ラレ・クマラ神は

逃亡した。ラレ・クマラ神はたまたまワヤンの上演に遭遇し、そこでダランに匿ってもらふ。カラ神もその場にやってくるが、腹が減っていたために、ワヤンの上演に用いる供物をすべて食べてしまった。カラ神は自分が食べてしまった供物と、トゥンプック・ワヤンに誕生したラレ・クマラを交換するという代価をダランに支払い、ワヤンは終了した。

その後、「ワヤンの聖水」が会場に置かれ、宗教的職能者であるジェロ・マンク jero mangku がワヤン人形の誕生日を祝う儀礼を執り行い<sup>(10)</sup>、続いてジェロ・マンクの音頭で参加者全員によるトゥリ・サンディヤ Trisandhhya [の真言] が唱えられた後、「ワヤンの聖水」が儀礼をうけた子どもに降りかけられることによって、「ワヤンの週」の特別な日に誕生した子どもの浄化儀礼が行われた。

この種の催しを実施することで、この儀礼をみたジャカルタの人々にバリのワヤンの文化を理解してもらえらるだろう。特に「ワヤン週」に誕生した子どもをもつ親は関心を持つだろうし、「ワヤン週」に誕生した子どもは、サブ・レゲール儀礼の中で行われるワヤンの上演や子どもが「ワヤン聖水」をふりかけられることで、関心を呼び覚まされたであろう。この催しはジャカルタにおけるバリのワヤン文化の育成と発展を意図して計画されたが、願わくばこうした[儀礼の]観念をポジティブに捉えて、人々がバリ文化を理解することを望んでいる。

この記事では、サブ・レゲール儀礼がジャワ・バリ暦（ウク暦）にもとづいて行われる儀礼であり、かつ特定の日に生まれた子どもが受ける除穢儀礼であることが最初に示される。次にワヤンの演目の内容が示され、同時にこの儀礼とワヤンとの関係について述べられている。続けて子どもの浄化儀礼の過程について示し、最後にこの儀礼がジャカルタにおけるバリのワヤン文化の紹介に寄与できる可能性について言及している。

この内容の仔細な点については、バリのサブ・レゲール儀礼と異なった部分がある。たとえば、「1日に3回の祈り」を意味するトゥリ・サンディヤは、バリにおいてこの儀礼の中で行う例がなく、この祈りの実践は、教義からヒンドゥー教を学んだバリ以外の人々の間で頻繁に行われている（スティア

1994:426-427)。また「ワヤンの聖水」を誰が、どのように準備したのかが記されておらず、この儀礼の宗教的職能者としてはダランではなく、寺院の祭司であるジェロ・マンクと記されている。しかし、バリにおける寺院の祭司は、この儀礼を行うことができない。こうしたことを考えると、『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』にみるこの宗教的職能者の記述は、二つの見解を可能にする。一つは、バリではみられないものの、ダランではなくジェロ・マンクがワヤンの上演終了後、上演に続くサブ・レゲール儀礼の過程を行ったというもの、もう一つは、ダランがジェロ・マンクを兼任しており、あえてヒンドゥー教の教義に記されていないダランの宗教的役割について文章の中で触れなかったという見解である。しかし、どちらにしても特定の日に誕生した子どもに「ワヤンの聖水」が準備され、それが子どもに灌頂されており、こうした記述からも、公的なヒンドゥー教の教義の中では触れられていない儀礼やその方法について記述されていることは明確である。

## ダランの宗教的役割

ダランは一般的には、インドネシアの伝統的な人形影絵芝居の人形遣い、すなわち演劇的役割を担うパフォーマーとして説明されているが、ジャワ、バリ両者のダランにおいてもこうした演劇的役割のほか、穢れを祓うという宗教的職能者としての役割を担っている。本論のテーマであるダランの後者の役割に関する研究は、オランダ植民地時代の民族学者らによりジャワのワヤンを事例にして、20世紀初頭から行われてきた<sup>(11)</sup> (Groenendaal 1987:14-15)。ジャワのダランが行う儀礼のうち、バリのサブ・レゲール儀礼に類似した浄化儀礼はルワタン ruwatan 儀礼とよばれ、この儀礼では「ムルウォコロ Murwakala」とよばれるカラ神にまつわる神話が上演される。しかしルワタン儀礼の場合は、バリのように特定の週（7日間）に誕生した子どもの通過儀礼として行われるのではなく、スケルト sukerta とよばれる約60種類ものカテゴリーに属する人間が受けなければならない儀礼とされている<sup>(12)</sup>。そうした点からバリのサブ・レゲール儀礼とルワタン儀礼には差異があり、またその浄化の方法や供物の種類などにも相違がある。しかしバリの事例に関しては、ダランの宗教的役割の側面を詳細に論じた文献は極めて少ない。

バリでは宗教的職能者としてのダランを、一般にマンク・ダラン mangku dalang とよぶ。マンクは寺院などを司る下層のカスタ kasta (インドのカースト制度にあたる) に属する宗教的職能者のことである。マンク・ダランであれば、ワヤン人形をつかって聖水を準備するための真言 (マントラ mantra) の知識と技量を持ち、単なる人形遣いとしてのダランから、マンク・ダランになるためのマウインタン mawintan とよばれる就任儀礼を受けたことを意味する<sup>(13)</sup>。ホーイカース C. Hooykaas は『バリの宗教』と題する著書の中でマンク・ダランをバリの宗教的職能者の一つとして取り上げ、聖水を準備して浄化儀礼を行う側面と超自然的存在に対してワヤンを上演できる側面について記している (Hooykaas 1973 : 14-15)。

バリの人々は、このマンク・ダランの準備する聖水を「ワヤンの聖水 tirta ringgit, toya ringgit」あるいは「浄化の聖水 tirta panlukatan」とよぶ (写真2)。この聖水は、マラ mala とよばれる人間の穢れ、あるいは死者の魂の穢れ<sup>(14)</sup> を祓う効力があるとされ、誕生から死までのさまざまな人生儀礼の中で幾度となく、マンク・ダランによって降り注がれる (写真3)。マラはサブ・レゲールのような誕生したときから身にふりかかる先天的な穢ればかりではなく、日々の生活やいくつかの過ちによって後天的にマラの状態になりうるとされる。それゆえ、さまざまな通過儀礼の際、マンク・ダランによりマラの除祓を受けるのである。こうした儀礼はすべてスダマラ sudamala (「マラを祓う」の意) とよばれ、サブ・レゲール儀礼



写真2 人形の支え棒を浸して聖水を準備するマンク・ダラン



写真3 マンク・ダランによる浄化儀礼

もこのスダマラ儀礼の一つといえる<sup>(15)</sup>。またマラの状態は生きている人間ばかりではなく、マラの状態で亡くなった死者の魂も穢れた状態にあると考えられているため、時には死後、その死者の魂に対してもワヤンの上演をともしなうスダマラ儀礼が行われる。

サブ・レゲール儀礼の穢れとは、「ワヤン週」というバリ・ジャワ暦の一年(210日)のうちの連続した7日間に誕生した子どもにふりかかる人喰い神カラの呪いである。そしてこのワヤン週に誕生した子どもの呪いを、唯一マンク・ダランだけが解き放つことができるのである。先に述べた『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』の記事では、「ワヤン週」に誕生したためにカラ神に食べられてしまうと考えられる(あるいはカラ神によって不幸や災いを被る可能性のある)子どもが、「ワヤンの聖水」によって浄化される過程が示されている。

ダランの宗教的職能者としての役割は、人間の穢れを祓う宗教的職能者としての行為だけでなく、寺院などの儀礼において天界より降臨する神々を祝福するためのワヤン上演の行為があげられる。いわゆる演劇的行為としての宗教的役割である。サブ・レゲール儀礼におけるワヤン上演を除けば、この



写真4 ワヤン・ルマの上演

ワヤンにはスクリーンが用いられず、観客も不要であり<sup>(16)</sup>、このワヤンのことをバリではワヤン・ルマ wayang lemah (「昼のワヤン、大地のワヤン<sup>(17)</sup>」の意)とよぶ(写真4)。この上演時間帯は、プダンダとよばれるの最高位の僧侶による宗教的行為と対

をなして上演されるため、プダンダの宗教的行為が終われば、物語の内容が完結していないにもかかわらず上演は終了する<sup>(18)</sup>(梅田 2001:103)。

以上のようにダランの宗教的役割は二つあり、一つは、宗教的職能者としてさまざまな人間や魂の穢れを祓う役割、もう一つは、ワヤン・ルマの形態で神々にワヤンを上演する役割である。どちらもマンク・ダランでなければ行うことのできない宗教的な行為といえよう。

## バリにおけるヒンドゥー教と国教化の歩み

ヒンドゥー教はインド古来の宗教である。インドネシア、特にジャワ島、スマトラ島、バリ島にその影響は大きく、すでに紀元前からその影響はあったとされる。バリにおけるヒンドゥーの影響は8世紀頃からで、14世紀以降、ジャワで栄えたヒンドゥーの教えが広まり、それがバリの土着信仰と融合し、混淆宗教としての「バリ＝ヒンドゥー教」が誕生した<sup>(19)</sup>。

バリにおけるヒンドゥー教は、ギアツが「現代バリにおける『内面的回心』」と題する論文の中で指摘したように、実践的な宗教、つまり宗教行為が儀礼の実践として営まれていると考えられてきた（ギアーツ 1987:301）。「教義が先にありき」の宗教ではなく、宗教行為がプラクティス（規則にしたがう行為）として営まれていることこそが信仰そのものであった。こうした考え方は、少なからず教義が広く流布した現在もなお、存在し続けているといえよう。

しかし、まとまった教義がなく、土着信仰と結びつき、実践を主体とした宗教であったために、バリのヒンドゥー教は国家において公認された宗教、つまりは「インドネシアにおけるヒンドゥー教」とはみなされなかった。

1949年に正式に独立国となったインドネシアは、「唯一神に対する信仰」を国是の一つとし、当初は、イスラム、カトリック、プロテスタントの三つだけを国家公認の「宗教 agama」と認定した。

この「宗教」の対概念として「慣習 adat」がある。つまり「宗教」でないものは、「慣習」とよばれ、これらは地方の宗教的観念、地方的慣習として「宗教」とは異なる位置付けに置かれたのである（福島 2002:326）。バリにおけるヒンドゥー教もまた、当初はこの「慣習」にランク付けされていた。こうしたインドネシアにおけるバリのヒンドゥー教の位置付けに対する批判や、国教となるまでの歴史は、すでにいくつかの研究が行われているためここでは触れないが<sup>(20)</sup>、重要な点は、インドネシアの宗教省が国家公認の宗教の要件として、宗教の名称、教義哲学の内容、唯一神の観念、聖典をあげていることである（杉島 1999:311）。こうした要件をみたすために、自らの宗教をバリ・ヒンドゥー教とし、多くの知識人たちによって教義や聖典が整えられて、1959年にバリのヒンドゥー教は、国家公認の宗教となり、「慣習」

から「宗教」へと格上げされた。この年、バリのヒンドゥー教徒の代表者機関としてバリ・ヒンドゥー教評議会が設立され、ヒンドゥー教の「宗教」化を精力的に推進した。その後ヒンドゥー教はバリ以外にも拡大し、1986年にヒンドゥー教評議会にはインドネシアという名称が付され、正式にはインドネシア・ヒンドゥー教評議会という名称にかわり、現在ではインドネシア全土のヒンドゥー教徒の代表機関として至っている。

## 宗教政策にみるダランの宗教性の変化

先に述べたように、インドネシアにおいてヒンドゥー教の「慣習」から「宗教」への格上げの中核的役割を担ったのが、ヒンドゥー教評議会設立時のメンバーであり、その後、1959年に評議会設立後から1960年代にかけて、この評議会は「バリのヒンドゥー教から慣習的な部分を取りのぞこう、あるいは慣習から宗教的な部分を抽出して整備しようという立場(鏡味 1995:39-41)」に立って活動を展開した。

ヒンドゥー教評議会の宗教政策のうち、ダランの宗教性に関して注目すべきは、ダランを単なる演劇的パフォーマーに限定するのではなく、その宗教的職能者としての地位の一部を、教義や指針の中に残そうとしていることにある。こうした方針は、1968年に開催された全国レベルのヒンドゥー教会議において決議された指針(Ketetapan Sabha Parisada Hindu Dharma ke II no.V/KEP/PHDP/68)の「宗教に関する規則」の項目にみられる。

ヒンドゥー教評議会は、これまで存在していた多種にわたる宗教的職能者をプンデタ pendeta (あるいはスリング sulinggih) とピナンディタ pinandita に二分した。プンデタは最高位の僧侶であり、僧侶自身がシヴァやブッダと一体になり、マントラ(真言)やムドラ Mudra(印行)、さまざまな祭器、花などを用いて聖水をつくる。プンデタはヒンドゥー教の大きな儀礼を司るためには不可欠な僧侶である。そしてこれらの僧侶に就するためには、ヒンドゥー教評議会の認可を必要とした。一方ピナンディタは、プンデタを補佐する役割と位置付けられ、そのランクはプンデタの下位に位置付けられる。またその権限は、定期的に行われる寺院儀礼の執行、寺院儀礼以外の執行(ただし儀礼にはプンデタの聖水を必要とするため、それを用い



なくてはならない) の大きく二つに大別される。1968年に制定された「宗教に関する規則」の中には、ピナンディタの僧侶の種類として大きく6種類の僧侶の名前が示されているが<sup>(21)</sup>、その一つにマンク・ダランもあげられている。この点からいえば、ダランは宗教的職能者の一つとして、ヒンドゥー教評議会により公認されたことになる。しかし重要なのはピナンディタの宗教的権限と本来ダランが行ってきた宗教的行為との間に齟齬が生じていることである。

既述したダランの役割の中で述べた「人間の穢れを祓う宗教的職能者としての行為」は、ピナンディタの宗教的権限に該当しない。なぜなら、この儀礼ではダラン(マンク・ダラン)自身が聖水を作り、それを浄化儀礼に用いるからであり、プンデタの聖水を用いないからである。ゆえにヒンドゥー教評議会によって公認されたマンク・ダランの「宗教」的行為は、超自然的存在に対してワヤン・ルマを上演する行為、つまりはダランの演劇的行為であり、それ以外の宗教的な行為は、「宗教」ではなく「慣習」に属している行為と換言することが可能である。マンク・ダランは、たとえ宗教的職能者であるピナンディタに分類されたとしても、その「宗教」行為は、影絵人形芝居のパフォーマーとしての演劇的行為でなくてはならない。ダランの宗教的役割と、ヒンドゥー教評議会が公認するダランの「宗教」的権限との関係をまとめると下記の図1のようになる。なお網がかかった部分は、ヒンドゥー教評議会が「宗教」的行為として認める部分である。

ダランの宗教的役割	神々などの超自然的存在(ニスカラ)に対するワヤンの上演	演劇的パフォーマンスとして儀礼行為	ヒンドゥー教評議会が公認する「宗教」的行為
	人形を用いて聖水(ティルタ)準備と、人間の穢れの祓除	非演劇的パフォーマンスとして儀礼行為	ヒンドゥー教評議会が無視する「慣習」的行為

図1 ダランの宗教的役割とヒンドゥー教評議会が公認するダラン役割の関係

ヒンドゥー教評議会によるダランに関する記述は、先に述べた『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』の中に散見できる。たとえばこの雑誌の中で最初にワヤンやダランについて書かれた「儀礼・ワヤン・教育の関係 Hubungan

Upatjara, Wayang dan Pendidikan」と題された記事（1970年38号）では、ワヤンが神秘性 *mystik* や魔術性 *magis* と関連することを、サブ・レゲール儀礼で用いられる演目を示すことで説明し、加えてダランがシワ神の人形の支え棒を水につけることで聖水を作り、それによって穢れを浄化すると述べている（Oka 1970: 3）。しかしこの論考の中で、ダランの役割として重要視されているのは、ダランの語る演目を通して、道徳、言語、慣習、古典文学などに関する教育的なものである。またこの記事においては、ダランの宗教的行為は、「神秘」「魔術」というおよそ「宗教」的ではない言葉で表現され、「慣習」的行為であることを強調しているといっても過言ではない。また1977年120号の「バリのダランとワヤンの演目 Dalang Bali dengan Lakonnya」の中では、ダランの文学性に焦点を当てており、それ以外の視点からはダランについて全く述べられていない（Wungsu 1977: 7-8）。その後、しばらくこの雑誌の中ではダランやワヤンに関する記事は見られないが、1991年293号「演技者としてのダラン Dalang sebagai Monoaktor」では、その演劇性のみに焦点を当てた。また文章ではないが、1994年の332号の裏表紙にはカラーでワヤン・ルマを上演するダランが掲載されている（写真5）。



写真5 『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』に掲載されたワヤン・ルマの写真

これはヒンドゥー教評議会が公認するピナンディタとしての、マング・ダランの「宗教」的行為（演劇的行為）である。

ヒンドゥー教評議会の公的なダランおよびワヤンに対するコメントは、後述するバリ・ワヤン財団 Yayasan Pewayangan Daerah Bali が主催し、1976年

11月8日から10日にかけて開催された「全バリ島ダラン会議 Penataran Dalang Seluruh Bali」<sup>(22)</sup> にみられる。そこでは「ヒンドゥー教におけるダランとワヤンの役割 Peranan Dalang dan Pewayangan dalam Agama Hindu」と題する発表が、ヒンドゥー教評議会の名のもとに行われ、ダランの役割を「芸術・娯楽・そしてまた宗教における精神主義をともしなう道徳教

育を担う役割とともに、決められた演目を上演することで、神々に対する儀礼（デワ・ヤドニャ Dewa Yadnya）、人間に対する儀礼（マヌサ・ヤドニャ Manusa Yadnya）、死に対する儀礼（ピタラ・ヤドニャ Pitara Yadnya）、悪霊に対する儀礼（ブタ・ヤドニャ Buta Yadnya）といったヒンドゥー教の儀礼を遂行するという役割を担っている。」と述べている（Surpha 1976: 8）。この発表にみる儀礼と関わるダランについてのヒンドゥー教評議会の考え方は、「儀礼に関連した演目を上演すること」なのであり、ダランの役割を演劇的行為に限定させることで、浄化儀礼を行うという「慣習」的行為については一切触れていない。またこの発表では、具体的にダランとワヤンの役割を7項目の箇条書きで細かく論じているが（Surpha 1976:8-9）、儀礼との関連では、ワヤンの上演そのものが、供物 upakara に付随するものと規定しており、ダランはあくまでも演劇的パフォーマーとしての位置付けがされているに過ぎない。また、ダランの他の役割としては道德教育、娯楽、国民文化の育成と地方文化の維持、国民性の強化などに触れられているにとどまっている。

このように現代バリにおけるヒンドゥー教の宗教改革において、ダランの役割もまた「宗教」と「慣習」に二分され、ヒンドゥー教評議会の言説およびその機関誌『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』の中ではダランの「慣習」的な要素は排除されていたといっているだろう。

## 文化政策にみるダランの宗教的役割の変化

バリにおける文化政策はスカルノ政権時から始められているが、その中でダランやワヤンと大きく関係する文化政策は、1960年に開校した国立伝統音楽高等学校 Konservatori Karawitan Indonesia におけるワヤン教育である。この高校は、バリの芸能を専門的に学ぶことのできる最初の公的な教育機関であり、伝統音楽、伝統舞踊、ワヤンについて専門的に学ぶことができる<sup>(23)</sup>。1963年からこの高校において、スグリワ I. G. B. Sugriwa の著作である『ワヤンとダランの知識 Ilmu Pedalangan / Pewayangan』が教科書として用いられるようになった。この本がインドネシア語で書かれた最初のバリのワヤンに関する文献である。この内容は、ワヤンの歴史、種類、哲学、

ヒンドゥー教の各儀礼と結びつく演目の概要、ワヤン人形の図像的特徴、上演するために必要なダランの演劇的知識について記されているほかに、ダランの教典である古文書ダルマ・プワヤンガン Dharma Pewayangan の中で特に上演に必要な部分（真言も含む）をアルファベット翻字し、真言部分以外はインドネシア語に翻訳して掲載されている。このように、教育機関で用いられる教科書の中では、ダランの人間を浄化するという宗教的役割については、知識としてわずかにふれられているものの、その方法については全く言及されず、演劇的パフォーマーとしてのダランを育成するための教科書としての要素が強く打ち出されている<sup>(24)</sup>。つまり国家の文化政策の枠組で実施されたバリにおけるワヤンの教育は、ヒンドゥー教評議会の方針に沿った形で、ダランの「慣習」的な役割は排除され、以後この教育内容が、芸術教育機関におけるバリのワヤン教育の方向性を決定したのである。こうした教育方針は高校レベルの教育機関だけでなく、1962年に設立されたインドネシア芸術舞踊アカデミー Akademi Seni Tari Indonesia, Denpasar<sup>(25)</sup> でも継承されて現在に至っている。このように教育機関で育成されるダランは、ワヤン上演をすることのできる演劇的なパフォーマーであり、「ワヤンの聖水」を準備して浄化儀礼を行うという「慣習」的な側面は、教育機関において一切、無視されることになった。

スハルト政権以降、文化政策は形を変えながらも継続的に行われた。注目すべきは州政府の直轄機関である文化審議育成委員会 Majelis Pertimbangan dan Pembinaan Kebudayaan<sup>(26)</sup> の設立とその活動である。観光開発における文化の保護と育成、共産党系の文化・芸術活動の監視という二つの役割をもって1966年に設立したこの委員会は、ワヤンに対する文化政策にも大きく貢献した<sup>(27)</sup>。それらの政策は、ワヤンのコンテストの開催とバリにおけるワヤン研究の成果の公刊だった。

文化審議育成委員会は1968年にゴング・クビヤル gong kebyar とよばれるガムラン編成のためのコンテスト開催を皮切りに、さまざまなガムラン gamelan 編成や芸能のコンテストを開催している。その一つが1971年に開催されたワヤン・フェスティバル Festival Wayang Kulit とよばれた全バリ州のダランによって上演されたワヤンのコンテストだった<sup>(28)</sup>。このコンテ

ストではダランの資質、その上演（演劇的行為）の評価にもとづいてダランを審査し、順位をつけた。その際、各々のダランの「慣習」に分類された宗教的行為については問題にされなかった。このコンテストにおいて、ダランはパフォーマーとして位置付けられ、以後ワヤンのコンテストは、ダランに関していえば、演劇的パフォーマーとしての側面のみを評価対象としている。

また研究の公刊としては、1974年に行われた第2回全インドネシア・ワヤン会議にあわせて作成された2冊の出版物が重要である<sup>(29)</sup>。この2冊は、ダランがつくる聖水やその準備のために用いる人形など、いわゆる「慣習」的な部分に関して大きくふれている。しかし、この研究が、バリ島外へ発信されていることが重要である。インドネシアのワヤン研究というアカデミックな文脈においては、あえてバリのワヤンの土着性について論じ、その歴史性を強調し、その一方、宗教やバリ州の文化政策の文脈では、ダランの「慣習」的な行為にできるだけ触れないようにしているのである。この2冊以降、文化政策機関の作成した報告書などの中には、ダランの「慣習」的な部分に言及した記述はほとんど見られなかった。

ワヤンの研究とその成果の出版は、1975年に州政府の資金援助で設立されたバリ・ワヤン財団により積極的に行われた。この財団は文化審議育成委員会のメンバーが中心になり、財団という形をとって委員会とは別形態で運営した組織だが、予算の出所が異なるだけで、運営はすべて文化審議育成委員会の中で行われていた。財団の出版物は、ワヤンの演目集（パクム Pakem）の作成と古文書（ロンタル lontar）のアルファベット転写である<sup>(30)</sup>。この財団もまたダランの演劇的行為だけを対象として出版活動を行った。また研究・出版だけでなく、既に述べた全バリ島ダラン会議（1975年、1976年）を主催し、1976年の会議については報告書を作成している。

その後1970年代後半から、大学機関であるインドネシア舞踊芸術アカデミーにおいてワヤン関係の出版物が刊行され、現在に至っている。これらの出版物は二つの内容に大別できる。一つは授業で用いる教科書、大学で行われたセミナーなどの報告書<sup>(31)</sup>で、もう一つは大学紀要などに発表される個人の研究論文である<sup>(32)</sup>。前者は大学の教育方針に基づいて作成されているため、ダランの宗教的役割についてはほとんど触れられていない。ところが教

員などの専門的な研究論文の中では、「慣習」的なダランの宗教的職能者としての役割にふれたものがここ数年に散見される。ダランのこうした役割については近年、個人による研究対象として取りあげられているものの、ダランの宗教的職能者としての「慣習」的な役割が、大学教育のカリキュラムに入れられておらず、更に大学紀要などに書かれた研究論文は、ほとんど一般の人々にまで届かないこともあって、芸術大学においてもヒンドゥー教評議会の宗教政策を踏襲する形で、ダランの「慣習」的な部分は教育現場からも排除されている。

### バリ芸能の聖俗論議セミナー（1971）におけるワヤンの位置付け

1971年、バリ州教育文化省のプロジェクトチームが主催して行ったバリ芸能の聖俗論議セミナー「舞踊における神聖な芸術と世俗的芸術に関するセミナー Seminar Seni Sacral dan Provan Bidang Tari」（1971）は、バリの芸能（舞踊が中心）のうち、観光に供することのできない芸能とできる芸能を聖俗のレベルで分類するために開催された（梅田 2003:79-80）。

このセミナーでは結局、観光の文脈における上演の可否を聖俗の二元論で分類することができず、聖俗のレベルで三つに芸能を分類した。ワリ wali は最も神聖な芸能で、儀礼をの要素として不可欠な芸能で、かつ物語性がないものと位置付けた。次に神聖なレベルはブバリ bebali で、これが儀礼に付随（付加）している芸能で、物語性があるもの、そして世俗的な芸能はバリバリハン balih-balihan と名付けられ、上記の二つ以外のジャンルと位置付けた<sup>(33)</sup>（Projek...1971:n.p.）。

このセミナーは本来、舞踊を中心としたものだったが、ワヤンもこうした分類の対象となって、その結果ブバリに分類された。つまり儀礼に付随して上演される芸能ではあるが、儀礼そのものはワヤンの上演がなくても成立すると解釈されたのだった。しかしこの分類はサブ・レゲール儀礼のように上演そのものが儀礼の過程として不可欠であるワヤンを無視した結果になった。ワリそのものに「物語性がない」と規定してしまっていた以上、演目をもつワヤンはワリに分類されることは不可能だった。そしてこうした結果は、ダランの「慣習」的な行為を無視した結果になった。サブ・レゲール儀

礼のワヤン上演はズバリに該当しない。儀礼に付随しているのではなく、儀礼そのもの、すなわち儀礼に不可欠な儀礼の一過程なのである。結局、ここで想定されたワヤンを上演するダランの役割は、「慣習」である部分を排除したヒンドゥー教評議会の指針にもとづくダランの有り様に準じた結果となった。

その後、芸術大学の教員であったロタ Ketut Rota はこの分類におけるワヤンの位置付けに対し、その著書の中で問題提起を行っている。彼は、1971年の聖俗論議セミナーの中でワヤンがズバリに分類されていることを指摘した上で、「もし入念にワヤンのあらゆる上演を概観した場合」と前置きしたうえで、ワヤンもワリ、ズバリ、バリバリハンのすべての分類に当てはめられるとし、サブ・レゲール儀礼で上演されるワヤンをワリに分類した (Rota 1977/1978 : 29-30)。以下の図2では、1971年のセミナーにおけるワヤンの分類とロタの分類を比較したものである。

	芸能の聖俗論議セミナー (1971) によるワヤンの分類	Lota. K, <i>Pewayanagan Bali</i> (1977/1978) によるワヤンの分類
ワリ	—————	サブ・レゲール儀礼で上演されるワヤン
ズバリ	ワヤンはすべてズバリに分類	ワヤン・ルマ、ワヤン・スダマラ <sup>(34)</sup>
バリバリハン	—————	ワリ、ズバリのワヤンに該当しないワヤン

図2 1971年のセミナーと Rota (1977/1978) におけるワヤンの分類の比較

しかしこの文献においてロタが強調したのは、ワヤンの上演演目そのものであって、ダランがワヤン終了後に行う浄化儀礼については一切論じていない。つまり、ここでも演劇的行為を伴わないダランの「慣習」的行為については言及されなかった。

## バリにおけるヒンドゥー教評議会の内紛と分裂

1998年にスハルトの長期政権が崩壊後、この政権を引き継いだハビビ B.J.Habibie 大統領は、スハルト色の一掃を打ち出すために「改革 (レフォルマシ reformasi)」を掲げ、選挙制度改革や言論統制撤廃などの民主化とと

もに、中央集権型統治の再検討を始め、1999年5月に地方行政法（1999年法律第22条）と中央地方財政均等法（1999年法律第25条）を成立させ、2001年1月より地方分権が施行された（松井 2002：209）。地方分権では多くの権限が、中央（国家レベル）から地方（州レベル）へ委譲されたが、その中でも外交、国防、司法、金融、宗教などはその対象にはならなかった。

こうした政治的背景の中、2001年9月に5年毎に開催されるヒンドゥー教評議会の第8回インドネシア全体会議 Maha Sabha VIII Parisada Hindu Dharma Indonesia がバリで行われた。この会議は「全体会議を通して、パリサダはヒンドゥー信徒に影響力を与える改革を行う」<sup>(35)</sup> をテーマに行われたが、このテーマはまさに政治や経済におけるインドネシアの急激な「改革」を意識した設定だった。そして、実際にこのテーマを反映してか、「改革」は、定款および活動方針の変更として具体化された。しかしその定款の変更をめぐり、その後バリ州のヒンドゥー教評議会内で内紛が起こり、ついには2001年11月に分裂してしまう。

この分裂の契機となった定款の変更点は、組織について記された第5条第20項の部分で、ヒンドゥー教評議会の組織改変のうち、事務局にあたる組織の局長（Ketua Umum）を高位の聖職者スリンギから選ぶのではなく、宗教知識に精通した一般人ワラカ walaka から選ぶというものだった（Parisada...2001:67）。この決議の際は、バリ州ヒンドゥー評議会の一部から強硬な異論があった。またこうした組織に対する不満は、それまで国家レベルのヒンドゥー教評議会が提唱する「改革」への不満として一気に爆発した形で表面化した。更にサンプラダヤ sampradaya とよばれるサイババ Sai Baba 信仰やクリシュナ Krishna 信仰を含むヒンドゥー教の新たな側面のヒンドゥー教評議会による肯定的見解の表明は、バリのヒンドゥー教のあり方に悪影響を与えるとして、バリ州ヒンドゥー評議会の一部のメンバーは強行に反発し、ヒンドゥー教評議会が設立された1959年、と2年後の1961年に出された方針への回帰と復古主義を打ち出し、ついには2001年11月に同じ機関名で分裂したのだった<sup>(36)</sup>。この要因は、ヒンドゥー教協議会がインドネシア全体のヒンドゥー教を代表する機関となってから以後の評議会が向かおうとする宗教理念と、バリの村落で実践的に行ってきた宗教的な行為が、明確に



乖離したことを物語っている。

この分裂は、バリの宗教と関連した儀礼や芸能とも少なからず関係することになった。本論の最初に示した『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』の記事もこうした分裂と無関係ではない。『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』の事務局長は、分裂して新たに設立したヒンドゥー教評議会の幹部であり<sup>(37)</sup>、その結果、サブ・レゲール儀礼のような「慣習」に触れる儀礼やダランの役割に関する記事が掲載されたのではないかと推測することができる。

## おわりに

1991年にヒンドゥー教評議会が監修したヒンドゥー教小辞典の「ダラン」の項には、「人形遣いであり、宗教教育の従事者」と書かれている (Musna 1991:16)。バリで信仰されていたヒンドゥー教を国家公認の宗教へと格上げする宗教改革の過程、いわゆるウェーバー M.Weber のいう「宗教の合理化」が行われた結果、ダランの宗教的役割の一部は、教義に相容れないという理由から剥奪され、「慣習」というカテゴリーに分類され、無視されるに至った。宗教の合理化は「在来のバリ人の信仰形態から離れて、近代的な宗教のかたちを目指そうとしたもの (鏡味 2000:106)」だったことはいうまでもなく、結果的には、バリ固有の宗教観や慣習は排除されるという結果をまねいた。バッケル F.L.Bakker はヒンドゥー教評議会の「慣習」に対する姿勢を、「始めから排除したのではなく、ヒンドゥー教評議会の考えるヒンドゥー化と衝突したとき、結果的にそれを放棄してしまう」と述べている (Bakker 1993:290)。また鏡味はこうした宗教の合理化を「バリ人の信仰慣習から慣習的な部分を取りのぞいて、すくなくとも国内で宗教として普遍的に通用する部分をすくい上げていくこと」と記しているが、ダランの宗教性もそうしたヒンドゥー教評議会の理念と政策に衝突し、呑み込まれてしまったといえよう。しかし「慣習」は無視されたに過ぎず、厳格に禁止されたわけではなく、少なくとも、現在もなおバリのダランによって行われる儀礼は、その頻度、人々の受け止め方、儀礼の方法に変化は生じてきているものの、「慣習」的な行為として今もなお実践され続けている<sup>(38)</sup>。

しかしこうした宗教政策がバリ社会において30年以上にわたり浸透した

一方で、2001年に起きたバリのヒンドゥー教評議会の宗教論争による内紛と分裂は、新たな文化政策に結びつくことになった。これが2002年12月に2日間にわたり文化審議育成委員会の主催によりバリで行われた「神聖な芸術に関するセミナー」の開催である。偶然にも2002年当時の文化審議育成委員会の委員長は、分裂して新たに設立された復古主義的なバリ州ヒンドゥー教評議会の会長と同人物だった<sup>(39)</sup>。

このセミナーにおいては1971年に行われた聖俗論議セミナーの指針の見直し、芸術の担い手の宗教性、教育機関での芸術のカリキュラムの問題点などが指摘され、このセミナーの指針は今後、州政府に答申される予定である。このセミナーではワヤンに関する議論も行われ、具体的にサブ・レゲール儀礼におけるワヤンはワリに分類されるべきである、という意見が発表者の配布資料の中に示されている (Rai S and Sedana 2002: 3)。こうしたダランの宗教的役割は、再び「慣習」から「宗教」へとその地位を復権するのだろうか？ダランはサブ・レゲール儀礼において、カラ神に食われまいとして逃走する子どもを「慣習」のもとに救うのか、それとも「宗教」のもとに手を差し伸べるのか？この問いの回答には、まだしばらくの時間が必要と思われるが、すでにその兆候は現れているといえよう。

## 附記

本稿は平成12年度国立民族学博物館共同研究会「ポスト『新秩序体制』インドネシアにおける地方的アイデンティティの人類学研究」において2001年7月7日に「現代バリにおけるダランの宗教性」と題して口頭発表した原稿の一部を用い、さらには2002年7月から10月にかけてインドネシア、バリ島において調査した資料の一部を加えて構成したものである。この問題に関する詳細な研究は、2004年にインドネシアで開催予定の会議で発表した後、論文として公表する予定である。なお2002年の調査は、平成14年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 A(1)）による研究「スハルト政権崩壊後のインドネシア地方社会に関する文化人類学的研究 (No.13371009)」(代表：杉島敬志)のもと、インドネシア科学院の調査許可番号 (No.4295/SU/KS/2002) にもとづいて行われた。

## 注

- (1) 『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』は、1967年10月に発刊されたヒンドゥー教評議会の機関誌であり、インドネシア各地のヒンドゥー教関連機関および教徒個人により購読されており、1967年から休刊することなく継続している。なおこの機関誌は満月にあたる日に刊行されるため、年に13回発刊される年がある。2002年11月現在、通巻で429号である。この機関誌の一部がジャカルタの国立図書館、またバリ州デンパサール市にある国立図書館、バリ州シンガラジャ市にある古文書図書館（グドゥン・キルティヤ Gedung Kirtiyya）に所蔵されている。これらの図書館は一般でも閲覧は可能である。
- (2) サプ sapu は「掃く」「追い払う」の意、レゲール leger は「汚い」を意味する「ルグット reget」、または「病気になった葉（落ちる葉）」を意味する「レゲル leger」を語源にしている。どちらにしても「汚いもの、あるいは病気になったものを掃き清める」という意味になる。
- (3) バリでは普通、三つの暦が並行して用いられる。一つは新月から新月を1ヶ月とし、12ヶ月で1年を構成するヒンドゥー・バリ暦、もう一つは7日を1週とする30週、つまり1年を210日で構成するウク暦（ジャワ・バリ暦）、また近年では1年を365日で構成するグレゴリオ暦も人々の生活の中に定着している。ニュピ Nyepi とよばれる新年を除くと、バリの儀礼の多くは、ウク暦にもとづいて行われている。
- (4) ウク・リングット wuku ringgit とよばれる。「ワヤン週」は、27番目のウクである。
- (5) トウンブックはウク暦の7日週のサニスチャラ saniscara とよばれる日と、5日週のクリウォン keliwon が重なる日（35日に1度）で、特に縁起がよい日とされている。1年に6回トウンブックはあるが、ワヤン週の最後はトウンブックに該当し、その日はトウンブック・ワヤンとよばれ、影絵芝居の人形や道具、舞踊の面や衣装、楽器などに対して供物が捧げられる。
- (6) ダランがマントラ（真言）、花、線香、供物、水、ワヤンの特定の人形（ダランにより多少の違いはある）を用いて準備される聖水のこと。

- (7) カラ神は、バリ古来の神々に対する敬称サン・ヒャン Sang Hyang あるいはヒンドゥー教的な神に対する敬称バタラ Bhatara をともない、サンヒャン・カラ Sanghyang Kala、バタラ・カラ Bhatara Kala とよばれる。また「死」を意味するムルティユ mrtyu、アンタカ antaka をカラの後に続け、カラムルティユ Kalamrtyu、カラントカ Kalantaka とよばれている。この神はバリでは、破壊・不幸・死などと結びつくと考えられ、たいへん恐れられている存在である。
- (8) この物語はバリで「チュパ・カラ Cupa Kala (カラ神の謎かけ)」とよばれる。物語のあらすじは、拙稿 (1996) を参照。
- (9) 「チュパ・カラ」ではパルワティ女神ではなく、ウマ女神とされる。なおパルワティ女神もシワ神の妻の一人である。
- (10) トウンブック・ワヤンは、ワヤン人形の誕生日とされ、ダランはこの日に必ずワヤン人形に対して供物を捧げる。
- (11) 20世紀初頭のダランの宗教性、特に悪魔祓いに関する研究としては以下の文献がある。

Hazeu, G. A. J. Een Ngruwat-Voorstelling. In *Album Kern; Opstellen geschreven ter eere van Dr. H. Kern*, Leiden: Brill, 1903, pp. 325-332.

Inggris. Het roewanfeest in de desa Karandjati in Bagelen. *Djawa* 3: 45-50, 1923.

Rassers, Willem Huibert. Over de zin van het Javaansche drama. *Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde* 81: 311-381, 1925.  
[W.H. ラッセルス「ジャワ演劇 (ワヤン) の意味」P.E. デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング他『オランダ構造人類学』宮崎恒二・遠藤央・郷太郎訳、せりか書房、pp. 359-428。]

- (12) スケルトの種類分類については、中島が60種類のスケルトを以下の6つのコードに分類している (中島 1993:184-185)。
  - ①きょうだい関係、②出世時の解剖学的状態、③時の状態、④空間の状態、⑤偶然による物事の状態の変化、⑥個人の性癖。
- (13) ヒンツラー H.I.R. Hinzler は、ダランの就任儀礼として二つのタイプが

あることを指摘する (Hinzler 1981:42-43)。一つは本論でのべたマウインタンであり、もう一つは「ワヤンとの結婚 (マサカパン・リン・ワヤン masakapan ring wayang)」とよばれる大掛かりな儀礼があることを指摘している。ヒンツラーによれば、後者の就任儀礼を終えることで、サブ・レゲール儀礼やスダマラ儀礼、ワヤン・チャロナランなどの呪術的な上演が可能であるとするが、筆者の調査では、ほとんどのダランは、マウインタン終えただけで、あらゆるワヤンを上演している。

- (14) 著者の調査によると、マラは大きく①魂（死者の魂も含む）の穢れ、②ウク・ワヤンに誕生した子どもの穢れ、③精神的な病気（後天的精神病および先天的精神薄弱も含む）、④生まれつきの身体障害（特に奇形をとまう）、⑤ハンセン氏病、リンパ腫である。サブ・レゲール儀礼はこのうちの②の穢れに対して行われる儀礼である。
- (15) スダマラの語源は、スダ suda「浄化」、マラ「穢れ」であり、浄化を意味する。
- (16) たとえばホーイカースは、ワヤン・ルマの観客について「せいぜい仲間にはぐれた子ども」と述べている (Hooykaas 1973:14)。
- (17) ワヤン・ルマは、「昼のワヤン」と訳されることが多いが、昼間に上演するだけでなく、昼夜にかかわらず上演される。また「大地のワヤン」の意は、ワヤン・ルマがプダンダの儀礼と対で行われる場合、プダンダは高い場所で聖水を準備する一方で、ワヤン・ルマは普通、地面を舞台にするか、あるいは地面に近い場所を舞台とするからである。
- (18) ミード M. Mead はプダンダの儀礼とワヤン・ルマの関係をその日記の中で「影絵芝居があったが、スクリーンもランプもない。ダランが坐って語り、闇の中で彼の指を動かしたが、誰も聞いていない。つにには夜もふけて、刺激的な静けさがおとずれた。摂政がやってきて、ダランにそれを止めよと言うと、誰もみていなかった芝居は終了した。」と述べている (Mead 1977:193)。この記述から、ワヤン・ルマの上演では、物語(演目)を完結させる必要がないことがわかる。
- (19) バリのヒンドゥー化はジャワと異なり、9世紀には北部バリからシヴァ教(ヒンドゥー教シヴァ派)、また南部からは大乘仏教の伝播が行われた

ことを示す碑文がみつまっている。10世紀のウダヤナ Udayana 王の時代には、シワ神に対する信仰と大乘仏教は国教とされた。その後、14世紀にジャワのマジャパヒト Majapahit 王国に征服されて以後、ジャワ化したヒンドゥー（ジャワ・ヒンドゥー）文化の影響化で、それ以前のバリ・ヒンドゥーとの間に混淆化が進み現在のバリのヒンドゥー教に至ったと考えられている。大乘仏教の影響は、現在でもブッダとよばれる高僧がいることからうかがえよう。

- (20) バッケル F. L. Bakker は、バリのヒンドゥー教の歴史を知識人達のヒンドゥー教に対する考え方を歴史的に研究することで明らかにしている。  
(Bakker 1993)
- (21) プマンク pemangku、ワシ Wasi、マンク・バリアン／ドゥクン Mangku Balian/Dukun、マンク・ダラン、プングンバン Pengemban、ダルマ・アチャルヤ Dharma Acarya の6種類があげられているが、このうちのプングンバン、ダルマ・アルチャについては不明であり、今後の調査が必要である。
- (22) 全バリ島ダラン会議は、バリ・ワヤン財団が設立された1975年に第1回が行われている。第1回目の報告書は作成されておらず、ワヤン財団の活動報告によれば、ダルマ・プワヤンガン Dharma Pewayanagan とよばれるダランの教典の異本や音楽に関する意見交換が行われたようである (Windhu 1978: 8)。第2回目の全バリ島ダラン会議は、発表者9人が、宗教、ダルマ・プワヤンガン（2名が発表）、バリ語、カウィ Kawi 語、メディア、上演技術、演目、ワヤン・ガンプ wayang gambuh についてのテーマで発表を行った。
- (23) ソロ市に設立されていた国立伝統音楽高等学校をバリにも設立するため、バリ州教育文化省は1959年にジャカルタの教育文化省に設立の申請を行い、1960年4月に許可が下り、同年9月に35名の生徒を迎えて開校する。調査によると、開校当初は音楽・舞踊・ワヤンなどの明確な専攻はなく、生徒も各教員の家で授業を受けるような有様だったという。教員には、バリの中から有名な演奏者や舞踊家、ダランが採用され、卒業生の一部は、公立学校の教員になったり、出身村に戻り、そこで学校で

学んだ楽曲や舞踊を教授した。

- (24) ロタの文献の中のⅢ.にあたるワヤンの役割に関する部分において、各儀礼（パンチャ・ヤドニャ *panca yadnya*）と関わる具体的演目について記述されているが、人間の儀礼（マヌサ・ヤドニャ）の項目の中に、特別な演目としてサブ・レゲール儀礼で上演される演目の概要が記されている。またマヌサ・ヤドニャの項目の最後には、儀礼を受けるものには「ワヤンの聖水 *air tirtha wayang*」が必要であり、ワヤンの上演を行わなくても、聖水さえあれば十分であると述べている。この記述は、ダランの「慣習」的部分に触れた部分として重要である。
- (25) 1986年に大学に格上げされ、インドネシア芸術大学デンパサール校 *Sekolah Tinggi Seni Indonesia, Denpasar* と名称を変更し、更に2003年には *Institute Seni Indonesia, Denpasar* と変更して現在にいたっている。
- (26) 一般には省略形でリスティビヤ *Listibiya* とよばれている。
- (27) 1966年の設立時には全6部門、①伝統舞踊・音楽、②美術、③国民音楽と舞踊、④バリ伝統文学・歌謡文学・影絵人形芝居、⑤国民演劇・映画・朗読・文学、⑥研究・図書館・博物館・教育にわかれている。その後、幾度か組織改編を行ったが、現在の組織では、上演芸術部門にワヤンが含まれている。
- (28) このフェスティバルは、ワヤンが組織的に指導・審査の対象になった最初のものであった。ウィンドゥによれば、バドゥン県だけでも36人のダラン中28名がこのフェスティバルに応募し、予選を1週間にわたって行ったという。またこのフェスティバルは、ダランに活気を与えた（Windhu 1978：7）。
- (29) 文化審議委員会が1974年に行われた第2回全インドネシア・ワヤン会議にあわせて作成した2冊のワヤン関連書は以下の2冊である。
  - ① *Serba Neka Wayang Kulit Bali*. Denpasar: Listibiya, 1974.

バリのワヤンに関する論集。歴史、ワヤン・ルマの概要、音楽（グンデル・ワヤン *gender wayang*）、ワヤン・フェスティバル、ワヤンと観光、エッセイ（「ワヤンのすばらしさ」）の六つから構成されている。

る。なお、この論集は1975年に改訂版がバリ州のプロジェクト（芸術に関する原稿の出版と芸術品購入のプロジェクト *Proyek Pencetakan / Penerbitan Naskah-Naskah Seni Budaya dan Pembelian Benda-Benda Seni Budaya*）により出版され、新たに6本の論考が加えられている。

② *Sapu Leger*. Denpasar: Listibiya, 1974.

シンガラジャ Singaraja の古文書資料館（グドゥン・キルティヤ Gedong Kirtya）に所蔵しているサプ・レゲール儀礼に関わるロンタル lontar 文書（Gaguritan Sapu leger 保管番号 Va. 645）をローマ字転写した刊行物である。なおこの文献は、1975年に改訂版がバリ州のプロジェクト（芸術に関する原稿の出版と芸術品購入のプロジェクト *Proyek Pencetakan / Penerbitan Naskah-Naskah Seni Budaya dan Pembelian Benda-Benda Seni Budaya*）により *Pewayangan Bali* として出版され、新たに3つのロンタル文書が加えられている。

(30) バリ・ワヤン財団が出版、あるいは出版に関与したものは下記の通り。

①ワヤン財団として編集した出版物（6冊）

Yayasan Pewayangan Daerah Bali 1976 *Penataran Dalang Seluruh Bali*. Denpasar: Yayasan Pewayangan Daerah Bali.

—— 1978 *Aneka Pewayangan Bali*. Denpasar: Yayasan Pewayangan Daerah Bali.

—— 1984 *Sutasoma*. Denpasar: Yayasan Pewayangan Daerah Bali.

—— 1986/1987 *Pakem Wayang Parwa Bali*. Denpasar: Yayasan Pewayangan Daerah Bali.

—— 1986/1987 *Ensiklopedi Mini Pewayangan Bali*. Denpasar: Yayasan Pewayangan Daerah Bali.

Madra, I Kt. *Wayang Parwa Bali*. 1978/1979 Denpasar: Yayasan Pewayangan Daerah Bali.

②ワヤン財団援助もしくはメンバーによる出版物（3冊）

Arthanegara, I G.B. et al. 1979/1980 *Kehidupan Dalang Bali*:



*Dari Mithologi Samapi Riwayat Hidup Dalang Bali.* Denpasar: Proyek Pengembangan Pewayangan Bali.

Windhu, Ida Bagus Oka et al. 1979/1980 *Mari Menonton Wayang.* Denpasar: Proyek Pengembangan Pewayangan Bali.

——— 1982/1983 *Kempulan Ceritera Wayang Bali.* Denpasar: Proyek Penggalan / Pengembangan Seni Budaya Klasik / Tradisional dan Baru.

- ③ワヤン財団の名称は出版物に入られていないが、財団が関与した出インタビューによる) (4冊)

Harnama, Dangin. 1979/1980 *Ballada Karma (Sebuah Kempulan Ceritera Pewayangan Bali).* Denpasar: Proyek Pengembangan Pewayangan Daerah Bali.

——— 1979/1980 *Kesetiaan Adalah Senjata Sang Ksatria (Sebuah Kempulan Ceritera Pewayangan Bali).* Denpasar: Proyek Pengembangan Pewayangan Daerah Bali.

Sumandhi, I Nyoman et al. 1980/1981 *Beberapa Dalang Bali.* Denpasar: Proyek Penggalan / Pengembangan Seni Budaya Klasik / Tradisional dan Baru.

Windhu, I. B. Oka et al. 1980/1981 *Suatu Hari di Kerajaan Leburgangsa (Kumpulan Ceritera Wayang Bali.)* Denpasar: Proyek Penggalan / Pembinaan Seni Budaya Klasik (Tradisional) dan Baru.

- (31) 舞踊芸術アカデミーおよび芸術大学におけるワヤンの教科書や報告書の多くは、教員であったロタ I Ketut Rota により書かれている。ロタの著作一覧 (1994年まで) は、以下の文献の pp.44-49にまとめられている。

Rota, Ketut 1994 *Pertunjukan Wayang Kulit Bali Sebagai Sarana Pendidikan Budi Pekerti : Suatu Kajian Fenomenologis.* Denpasar: Sekolah Tinggi Seni Indonesia.

- (32) 芸術大学の研究紀要は *Mudra* (ISSN 0854-3461) で、1993年に発刊され、2002年までに12冊刊行されている。バリのワヤンに関する研究は以

下の通りである。

Rota, Ketut 1993 Alternasi: Salah Satu Ragam Tutur yang Sangat Potensial dalam Retorika Pertunjukan Wayang Kulit Bali. *Mudra Edisi Khusus* [1]: 47-58.

Sedana, I Nyoman 1995 Cupak ke Sorga Sebuah Model Penggarapan Lakon Wayang Kulit. *Mudra* 3: 103-119.

Seramasara, I Gusti Ngurah 2000 Sejarah Pewayangan di Bali: Sebuah Renungan. *Mudra* 9: 77-87.

Suteja, I Nyoman 1995 Unsur Ritus Keagamaan dalam Pertunjukan Wayang Kulit Bali: Sebuah Pengantar. *Mudra* 3: 134-145.

Wicaksana, I Dewa Ketut 1996 Wayang lemah Refleksi Nilai Budaya dan Agama. *Mudra* 4: 102-116.

——— 1998 Wayang Sapu Leger: Fungsi dan Maknanya dalam Masyarakat Bali. *Mudra* 6: 84-126.

——— 1999 Simblisme Kekayonan Wayang Kulit Bali. *Mudra* 7: 75-88

——— 2000 Perkembangan dan Masa Depan Seni Pedalangan / Pewayangan Bali. *Mudra* 8: 127-141.

——— 2000 Eksistensi Dalang Wanita di Bali: Kendala dan Prospeknya. *Mudra* 9: 88-112.

——— 2001 Lakon Antakusuma Analisis Struktural dan Nilai Budaya. *Mudra* 11: 30-46.

(33) セミナーの答申における正確な分類名は、スニ・タリ・ワリ Seni Tari Wali、スニ・タリ・ブバリ Seni Tari Bebal, スニ・タリ・バリバリハン Seni Tari Balih-balihan である。

(34) スダマラ儀礼で上演されるワヤンのこと。この分類においてロタは、ワヤン・スダマラとワヤン・サブ・レゲールを別に考えている。筆者の見解では、注 14 にのべたように、ウク・ワヤンに誕生した子どももマラのカテゴリーに属するため、ワヤン・スダマラには、ワヤン・サブ・レ

ゲールも含まれるが、この表（ロタの見解）では、ワヤン・サブ・レゲール以外のワヤン・スダマラを指している。

- (35) 原語は、Melalui Maha Sabha VIII Parisada Melalikan Reformasi Guna Meningkatkan Pemberdayaan Umat.
- (36) 以下の文章は、サンプルダヤに対し異論を唱え、分裂して新たに設立されたバリ州ヒンドゥー教評議会の出版物からのサンプルダヤの見解に関する抄訳である（Parisada...2002：9-11）。

「現代、バリの人々の教育は進み、海外に行くものまででてきた。さらにグローバル化の時代を迎え、バリにも世界中からさまざまな情報が入ってきた。その一つが、クリシュナ信仰や、サイババ信仰、シーク信仰である。これらの信仰は悪いものではない。しかしこれらがバリに入ることにより、バリにもともとある信仰が壊れてしまう。これらの信仰はバリのパンチャ・ヤドニャを不要にする考え方を持っている。ラワールに香水を入れても意味をなさない。ラワールはラワールで完結しているのであって、たとえ香水がすばらしくても、それが入ったラワールは捨てなくてはならない。また美しい髪にさらに櫛をいれるならば、髪が痛んでしまうだろう。パリサダ・バリはこうした信仰を受け入れることはできないのである。サンプルダヤは宗教ではなく、スピリチュアルである。こうした考え方がバリに入ってくるのを、インドネシア政府とヒンドゥー教評議会が警戒しなくてはならないのである。」

なお、バリにおけるサイババ信仰、クリシュナ信仰については、Howe 2001: 163-198 に詳しく論じられている。

- (37) アガスティヤ Ida Bagus Geda Agastiya は、現在、『ワルタ・ヒンドゥー・ダルマ』の事務局長であり、新たに設立されたバリ州ヒンドゥー教評議会のワラカ（宗教的職能者ではない一般人）の幹部の一人として名前があがっている。
- (38) たとえばサブ・レゲール儀礼などの場合、ワヤンの上演の方法が変化し、本来は「チュパ・カラ」の演目を行うところ、その演目の前にサブ・レゲール儀礼とは無関係のマハバラタやラマヤナからの演目を上演し、それらが終了した後、20分程度で上演を終えてしまうなどの事例が見られ

る。こうした上演は1970年代からはじめられたのだという。

(39) アンディヤナ I Gusti Putu Rai Andayana

## 参考文献

- Bakker, F. L. 1993 *The Struggle of the Hindu Balinese Intellectual: Developments in Modern Hindu Thinking in Independent Indonesia*. Amsterdam: VU University Press.
- Diya, W. 2002 Apresiasi Wayang di Jakarta. *Warta Hindu Dharma*. 426: 18-19, 35.
- Eddy, Nyoman Tusthi 1991 Dalang sebagai monoaktor. *Warta Hindu Dharma*. 293: 32-34, 42.
- 福島真人 2002 『ジャワの宗教と社会——スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール』 ひつじ書房。
- ギアーツ, C. 1988 『文化の解釈学 I』 吉田禎吾・柳川啓一・板橋作美訳、岩波書店。[Clifford Geertz. *The Interpretation of Culture: Selected Essays*, New York: Basic Books.]
- Groenendaal, Victoria M. Clara Van 1987 *Wayang Theatre in Indonesia: An Annotated Bibliography*. Dordrecht: Foris Publication.
- Hinzler, H.I.R. 1981 *Bima Swarga in Balinese Wayang*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Hooykaas, C. 1973 *Religion in Bali*. Leiden: E.J. Brill.
- Howe, Leo. 2001 *Hinduism & Hierarchy in Bali*. Sant Fe: School of American Research Press.
- 鏡味治也 1995 「儀礼の正装論議に見る現代バリの宗教事情」『民族学研究』60(1): 32-49。
- 2000 『政策文化の人類学 せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民』 世界思想社。
- 松井和久 2000 「第5章 地方分権化と国民国家形成」佐藤百合編『民主化時代のインドネシア 政治経済変動と税制改革』アジア経済研究所、pp. 199-246。

- Mead, Margaret 1977 *Letter from the Field, 1925-1975*. New York: Harper & Row. (マーガレット・ミード 1985 『フィールドからの手紙』 畑中幸子訳、岩波書店)
- Musna, Wayan 1991 *Kamus Agama Hindu*. Denpasar: Upada Sastra.
- 中島成久 1993 『ロロ・キドゥルの箱 ジャワの性・神話・政治』 風響社。
- Oka, I Gst. Ag. 1970 Hubungan Upacara, Wajang dan Pendidikan. *Warta Hindu Dharma*. 38 : 3-4, 6.
- Parisada Hindu Dharma Indonesia Propinsi Bali. 2002 *Dharma Wacana Parisada Hindu Dharma Indonesia Propinsi Bali di Pura Agung Besakih Tgl. 1 Januari 2002*. Denpasar: Parisada Hindu Dharma Indonesia Propinsi Bali.
- Parisada Hindu Dharma Pusat 1985 *Hinpunan Keputusan Seminar Kesatuan Tafsir Terhadap Aspek-Aspek Agama Hindu I-XV*. [Jakarta]: Parisada Hindu Dharma Pusat.
- Parisada Hindu Dharma Indonesia Pusat 2000 *Hasil-Hasil Maha Sabha VIII: Denpasar, 20-24 September 2001*. Jakarta: Parisada Hindu Dharma Pusat.
- Projek Pemeliharaan & Pengembangan Kebudayaan Daerah Bali 1971 *Seminar Seni Sacral dan Provan Bidang Tari, 24-25 Maret 1971*. Denpasar: Projek Pemeliharaan & Pengembangan Kebudayaan Daerah Bali.
- Rai S, I Wayan and I Nyoman Sedana 2002 Konsep Sakral dalam Seni Pertunjukan Bali. *Paper of Seminar dan Lokakarya Seni Sakral, 20-21 Desember 2002*.
- Rota, Ketut 1977/1978 *Pewayangan Bali: Sebuah Pengantar*. Denpasar: Proyek Peningkatan / Pengembangan ASTI Denpasar.
- スティア, プトゥ 1993 『バリ案内』 鏡味治也・中村潔訳、木犀社。[Putu Setia. *Menggugat Bali: Menelusuri Perjalanan Budaya*. Jakarta: Grafiti.]
- 杉島敬志 1999 「人類学の歴史研究——バリ宗教の近代史」 栗本英世・井

- 野瀬久美恵編『植民地経験——人類学と歴史学のアプローチ』人文書院、pp. 305-325。
- Sugriwa, I Gusti Bagus 1963 *Ilmu Pedalangan / Pewayangan*. Denpasar: Konservatori Karawitan Indonesia Djurusan Bali Denpasar.
- Surpa, I Wayan 1976 Peranan Dalang dan Pewayangan dalam Agama Hindu. Yayasan Pewayangan Bali (ed.) *Penataran Dalang Seluruh Bali*. Denpasar: Yayasan Pewayangan Bali, pp. 1-9.
- 梅田英春 1996 「サブ・レゲール——バリ、不幸な誕生日を浄化する儀礼」『季刊民族学』76: 96-104。
- 2001 「神々に捧げるワヤン——スクリーンのない影絵人形芝居『ワヤン・ルマ』にみる儀礼性」『民族藝術』17: 100-110。
- 2003 「バリ舞踊の聖俗論議セミナー（1971）の指針をめぐる小論」『ムーサ（沖縄県立芸術大学音楽学研究誌）』4: 79-92。
- Windhu, I. B. Oka 1978 Kegiatan Pewayanangan Bali. In Yayasan Pewayanangan Daerah Bali (ed). *Aneka Pewayangan Bali*. pp. 5-13.
- Wungsu, A Utara 1977 Dalang Bali dengan Lakonnya. *Warta Hindu Dharma*. 120:7-8.